３−６　美学・西洋美術史

研究・教育活動の概要と特色

美学・西洋美術史研究は、人間の証とでもいうべき感性、創造性に依拠しています。「近代」においてはとくに芸術が、宗教や共同体幻想を代行するまでになっています。だとするとそれにはどのような意味があるのか、を問わなければなりません。その問を具体的な作品にアプローチすることで果たそうとしています。芸術作品が成り立つその前提を疑うという姿勢から、新たな価値観を見いだす作業を「美学」において学べるように努めています。本講座で学ぶ美学は、いわゆる伝統的な理論的美学ではなく、美術史研究を行っていく上での方法論を考える、価値判断の重要性を認識する手段となっています。
一方、美術史学は作品を歴史的コンテキストの中で調べ、現代的な批評の視点でその様式、図像、社会的位置を研究するように努めています。美術史においては、イタリア「ルネサンス」を中心に「ゴシック」や「バロック」、「近代美術」を様式的分析ばかりでなく、その「イコノロジー」的考察、社会史的分析を視野に入れて芸術家と作品との関係を考察することに主眼を置いています。それに加えこれまでマイノリティーの問題であった、東洋からの西洋美術への影響を取りあげ、その意義を明らかしていきたい。

Ⅰ　組織

１　教員数

教授：1
准教授：1
講師：1
助教：0
教授：尾崎彰宏
准教授：芳賀京子
講師：フランチェスコ・リッツァーニ

２　在学生数

学部 （2 年次以上）	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生
24	0	5	12	0

３　修了生・卒業生数

年度	学部卒業者	大学院博士課程前期修了者	大学院博士課程後期修了者（満期退学者）	博士学位授与者
04	10	3	0	1
05	8	3	0	0
06	7	4	0	0
07	8	2	0	0
08	8	3	1	0
計	41	20	1	1

Ⅱ　過去5年間の組織としての研究・教育活動（2004～2008年度）

１　博士学位授与

１－１　課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
04	1	0	1
05	0	1	1
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
計	1	1	2

１－２　博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

松田和子、2004 年度、『シュルレアリスムと手』

審査委員：教授・田中英道(主査)、教授・尾崎彰宏、教授・長岡龍作、助教授・今井勉

石鍋真澄、2005 年度、『ピエロ・デッラ・フランチェスカ』

審査委員：教授・尾崎彰宏(主査)、教授・長岡龍作、教授・松本宣郎

２　大学院生等による論文発表

２－１　論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
04	2	3	1	0	6
05	0	3	2	0	5
06	1	3	0	0	4
07	0	1	0	0	1
08	2	0	0	0	2
計	5	10	3	0	18

２－２　口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
04	0	2	4	0	6
05	0	2	6	0	8
06	0	2	0	0	2
07	0	4	1	0	5
08	0	3	1	0	4
計	0	13	12	0	25

２－３　上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

（１）論文

岩屋 晶「ラファエロ《ガラテア》の凱旋をめぐって」『美術史学』 第 27 号 53-74 頁、2006 年

石澤靖典「ボッティチェッリの『神曲』素描とフィレンツェ人文主義」『美術史学』第 25 号、2004 年

奥田亜希子「コスメ・トゥーラとフランチェスコ・デル・コッサ――ボルソー・デステ時代のフェッラーラ芸術展」『美術史学』、2007 年

加藤奈保子「カラヴァッジョの少年像の研究」『鹿島美術研究年報』 第 23 号別冊（2005 年度）381-389 頁、 2006 年

門田彩「展覧会評「エル・グレコ」展をめぐって（ニューヨーク、2003-04 年/ロンドン、2004 年）」『美術史学』第 25 号、2004 年

門田彩「エル・グレコ作、サンファン・バウティスタ施療院附属礼拝堂祭壇画《キリストの洗礼》をめぐって」『スペイン・ラテンアメリカ美

術史研究』第 5 号、2004 年
門田彩「《聖イルデフォンソ》（イリェスカス、カリダー施療院）をめぐって――ペドロ・サラサール・デ・メンドーサとの関係を中心に」『美学』232 巻 2008 年
喜田早菜江「シャルダンの初期風俗画―肖像画と風俗画のジャンル横断をめぐって―」『美術史学』 第 26 号 123-144 頁 2005 年
絹川陽子「サン・ロレンツォ教会における建築家ミケランジェロ――四つの未解決問題――」『美術史学』2007 年
久保寿子「ヤン・ファン・エイクの《聖バルバラ》－構図・図像・発想源『美術史学』第 26 号、2005 年
工藤弘二「展覧会評 ポール・セザンヌ没後一〇〇周年記念「プロヴァンスのセザンヌ」展」」『美術史学』 第 27 号 137-148 頁 2006 年
工藤弘二「セザンヌの水浴図研究」『鹿島美術研究年報』 第 24 号別冊（2006 年度）310-321 頁 2007 年。
小松健一郎「コレッジョ作《ウェヌスとクピドとサテュロス》― ― ニコラ･マッフェイのコレクションと「古代風」作品」『美学』 第 227 号 15-28 頁 2006 年
高橋優季「ブリューゲル作「月暦図」連作における風景表現をめぐる一考察」『美術史学』第 27 号 77-102 頁、 2006 年
柳原一徳「ドラクロワ「サン=シュルピス聖堂聖天使礼拝堂壁画」研究―写真の視点から」『鹿島美術研究年報』 第 23 号別冊（2005 年度）126-136 頁、 2006 年
佐々木千佳「トリヴァルツィアーナ図書館蔵《ラファエーレ・ツォヴェンツォーニの肖像》をめぐる詩人と画家」『美学』（233 号）2008 年
森田優子「カルパッチョ作スキアヴォーニ連作をめぐる一考察」『美術史』第 156 号、2004 年
森田優子「展覧会評「ヴェネト絵画の潮流を見る」」『美術史学』 第 26 号 175-179 頁、2005 年
森田優子「聖ルカの遺体の移送――パドヴァのサンタ･ジュスティーナ聖堂サン・ルカ礼拝堂をめぐって」
森田優子「聖アウグスティヌスの書斎――カルパッチョ作「スラブ人会」連作をめぐって」『美学』（233 号）2008 年

（２）口頭発表

阿部 愛「カラヴァッジョのコピー制作にかんする考察」第 58 回美学会全国大会、2007 年 10 月 7 日

門田彩「エル･グレコ作、イリェスカスの《聖イルデフォンソ》にかんする一試案」第 58 回美学会全国大会、2007 年 10 月 7 日

門田彩「エル・グレコとペドロ・サラサール・デ・メンドーサ～《聖イルデフォンソ》考察より」スペイン・ラテンアメリカ研究会 2007 年 12 月 8 日

喜田 早菜江「肖像画としての風俗画、あるいは風俗画としての肖像画―シャルダンにおけるジャンルの横断をめぐって―」第 56 回美学会全国大会、2005 年 10 月 10 日

小松 健一郎「コレッジョ作《ウェヌスとクピドとサテュロス》をめぐる一考察」第 55 回美学会全国大会、2004 年 10 月 10 日

小松 健一郎「「周辺（periferia）の画家」―コレッジョの形成期における諸流派との関係―」第 61 回美術史学会全国大会 2008 年 5 月 31 日

榊田 亜佐子「ヒューホ・ファン・デル・フース作ベルリンの《降臨》にかんする一考察」第58回美学会全国大会、2007 年 10 月 7 日

鈴木幸野「ブレンツォーニ家墓碑におけるピサネッロ作壁画をめぐる考察」第59回美学会全国大会、2008 年 10 月 13 日

武井 敏「ティントレットとグリッド」第 57 回美学会全国大会、2006 年 10 月 8 日

高橋 優季「「悦楽の地」としてのフランドル――ブリューゲル作「月暦画」連作をめぐって」第 59 回美術史会全国大会、2006 年 5 月 28 日

二宮洋輔「ヴァン・ダイクの肖像画における「岩」のモチーフに関する一考察」第59回美学会全国大会、2008 年 10 月 13 日

東山 大奈「ルーベンス《ガニュメデスと鷲》について」第 56 回美学会全国大会、2005 年 10 月 9 日

森田 優子「聖アウグスティヌスの書斎――カルパッチョ作スクオーラ・ダルマタ連作をめぐって」第19回美学会東部会例会、2007 年 11 月 24 日

３　大学院生・学部生等の受賞状況

なし

４　日本学術振興会研究員採択状況

なし

５　留学・留学生受け入れ

５－１　大学院生・学部学生等の留学数

2004 年度 博士後期課程　計２名　ヴェネツィア大学、ローマ大学(イタリア)

2005 年度 博士後期課程　計３名　ボローニャ大学（イタリア)、パリ第一大学（フランス)、マドリード・コンプルテンセ大学（スペイン)

2007 年度　博士後期課程　計３名　ドルトムント大学（ドイツ)、フィレンツェ大学（イタリア)、ピサ大学（イタリア)

2008 年度　博士後期課程　計２名 レンヌ大学（フランス)、ヴェローナ大学（イタリア)

５－２　留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
04	0	0	0
05	0	0	0
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
計	0	0	0

６　社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
04	0	0	0
05	0	0	0
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
計	0	0	0

７　専攻分野出身の研究者・高度職業人

７－１　専攻分野出身の研究者

2004 年度　今井　里江子　札幌彫刻美術館学芸員

2005 年度　柳原　一徳　　島根県立美術館

2006 年度　武井　敏　　碌山美術館

2007 年度　喜田早菜江　　志賀高原ロマン美術館

７－２　専攻分野出身の高度職業人

2004 年度　１名

2005 年度　２名

2006 年度　１名

2007 年度　１名

８　客員研究員の受け入れ状況

なし

９　外国人研究者の受け入れ状況

なし

１０　刊行物

『美術史学』（年刊）

１１　学会･研究会･講演会･シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

2004 年度

10 月 23 日「イタリア学会」共催：イタリア学会（於：東北大学文学研究科）

2005 年度～ 2006 年度

美術史学会本部・東支部事務局

2007 年度

11 月 24 日 美学会例会　共催：宮城県美術館（於：宮城県美術館）

2008 年度

8 月 2 日 イタリア美術特別講演会 「メディチ家の考古学コレクション」

１２　専攻分野主催の研究会等活動状況

［講演会］

・2005 年度

特別講演会　2 月 4 日「ギリシア美術への招待－古代遺跡巡り」芳賀京子（国立西洋美術館リサーチフェロー）

［研究会］

・2007 年度

6 月 21 日　若手研究者萌芽研究育成プログラム「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相 ― 15 世紀から 17 世紀におけるアジアとヨーロッパの出会い―」定期研究会「15-16 世紀ヴェネツィアの都市景観について」発表者：佐々木千佳

・2008 年

6 月 24 日　若手研究者萌芽研究育成プログラム「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相 ― 15 世紀から 17 世紀におけるアジアとヨーロッパの出会い―」定期研究会第三回 「15 世紀フィレンツェにおける都市景観図の展開－ 都市の理念とＦ．ロッセリ作《フィレンツェ図》 -」発表者：石澤靖典

［読書会］

2004 年 2 月 27 日、3 月 19 日

2005年4月16日、5月7日、7月30日、8月23, 24日、12月26日
2006年2月27日、4月8日、7月29日、9月29日、11月4日
2007年2月17日、3月31日、10月20日
2008年2月28日、8月24日、9月28日

［卒論・修論発表会］
2004年7月20日
2005年7月16日
2006年8月2、3日
2007年6月25日、7月17日
2008年7月22日、7月25日

［研究会］
・2004年度
9月26日　小松健一郎「コレッジョ作《ウエヌスとクピドとサテュロスをめぐる一考察》
12月23日　柳原一徳「ドラクロワ〈リュクサンブール宮図書室天井画〉の小カトーをめぐる考察」
・2005年度
7月5日　加藤奈保子「17世紀初頭のローマとカラヴァッジョ― 1603年頃の活動を中心に」
8月29日　東山大奈「ルーベンス《ガニュメデスと鷲》について」
8月29日　喜田早菜江「肖像画としての風俗画、あるいは風俗画としての肖像画―シャルダンにおけるジャンル横断をめぐって―」
10月10日　石澤靖典「サンドロ・ボッティチェッリ研究」
・2006年度
・2007年度
4月24日　奥田亜希子「フラアンジェリコ研究《十字架降下》をめぐって」
4月24日　絹川陽子「ピサのカンポ・サントの壁画《死の勝利》に描かれた、人間の腐敗した死体の意味」
1月22日　榊田亜佐子「ヒューホ・ファン・デル・フースの後期作

品について」

1 月 22 日　阿部愛「ローマにおけるカラヴァッジョ芸術の広がり――私的コレクションのための宗教画を中心に」

・2008 年度

7 月 25 日　榊田亜佐子「ヒューホ・ファン・デル・フース作《降誕》について」

7 月 25 日　伊藤麻衣「ルーカス・クラーナハ（父）《聖カタリナ祭壇画》」

7 月 25 日　阿部愛「ローマを中心としたカラヴァッジョ芸術の広がり――ロンドン、ナショナル･ギャラリー所蔵《エマオの晩餐》を中心に――」

１３　組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

2004 年度から 08 年度までの 5 年間のうち 1 年間は、教授 2 名によって研究・教育活動を行ってきたが、04 年度をもって一名の教員が定年により退職し、05 年度は教授 1 名と助教 1 名体制になった。そのため学部・大学院を合計すると 50 人近い学生を抱える研究室としては、教育・研究のヴァリエーションの幅が小さくなったことは否めない。

教育活動としては、大学院生の課程博士論文の授与数がこの 5 年間に 1 名しかいなかったのは、いかにも少なすぎる。しかもその学生は社会人入学者であり、現役の学生の授与者はいなかった。博士課程後期に進学する院生には、博士論文の提出を強く促しているが、現実には、なかなか思うような成果に結びついていない。

その理由はいくつか考えられる。一つは、全国学会で発表後、最初の論文を作成するところまでは、ある程度順調にいくが、そのあと、留学の準備やそして留学によって、実際に論文を作成するよりも、作品を見てまわり、文献を調べたり調査したりする充電期間が予想以上に長くかかっていることがあげられる。

もう一つは、昨今の学生の場合、ロールモデルの存在が非常に大きい。博士論文提出者の理想的なロールモデルとなる学生が現在まで研究室にあらわれていない。その理由としては、論文を書くと言うことの意味づけが今ひとつ諒解されていないのではないか。本研究室でも、博士課程に進学した学生大半が、

それぞれの専門領域におうじて海外の研究機関へ留学をしている。留学前後と比較すると、当該学生の語学力には格段の進歩がみられることは確かだ。作品の調査能力の進化にも一日の長が見うけられる。しかし、人文学にとって不可欠ともいえる、問題意識――なぜこの問題に取り組むのか、という必然性が深化しているとは言い難い。これがやはり、帰国後、留学と研究成果の発表とに直接的な結びつきがやや欠ける理由ではないか。

こうした研究・教育上の問題点は早くから意識されており、専攻分野主催の研究会などの活動をできるかぎり積極的に行ってきた。授業や演習とは別に、院生をレポーターとして、美術史という分野の視点に立って美術史関連分野の書物を読んでその問題点と課題を発表し参加者で議論する研究会を定期的に開催している。そうすることで、ややもすると自分の専門領域の狭い範囲に閉じこもりがちな院生の問題意識を活性化させる努力をしている。

さらには、学部生、院生を交えた作品の調査・研修旅行を毎年企画し、作品への接し方や問題意識など日常を脱したところで自由に語り合うことも行っている。しかし、成果という点からすると、まったく充分とは言い難い。研究指導において、学生のモティベーションをさらに高めていくことが、今後の院生指導の課題である。

最後に学生の就職にふれておきたい。学部卒業生の就職状況は、公務員、一般企業など、業種はまちまちであるが、それぞれ積極的に活動しおおむね良好である。院生の場合も、博士課程の前期修了者の場合、とくに専門領域にこだわらない形で就職を希望するものは、出版、マスコミなどそれぞれの希望に合わせて就職している。美術館、大学教員など専門職を希望する院生は、博士課程後期に進学しているが、状況は 10 年前とくらべると厳しい。このあたりの学生支援をどのように進めていくかが課題である。

Ⅲ　教員の研究活動（2004～2008年度）

1　教員による論文発表等

1－1　論文

尾崎彰宏「レンブラントとメランコリー――寓意と現実の境界侵犯――」、平成 14 ～ 15 年度科学研究費補助金・基盤研究(B)（2）研究成果報告書『「古典主義」美術の理論的研究』、東北大学文学部、2004 年、pp.121-141.

Akihiro OZAKI, Rembrandt and Melancholy--Transgressing between Allegory and Reality---, *Rembrandt as Norm and Anti-Norm*, Graduate School of Letters Kyoto University 2004, pp. 61-92.

Akihiro OZAKI, Rembrandt's Nude: Studey of Danaë, *Rembrandt and Dutch History Painting in the 17th Century*, The National Museum of Western Art, Tokyo, 2004, pp.111-122.

尾崎彰宏「画廊画の誕生――絵画の自己言及性をめぐって」, 『東北大学歴史資料アーカイヴの構築と社会的メディア化』, 平成 16 年度東北大学教育研究共同プロジェクト成果報告書、2005 年、pp.70-82.

尾崎彰宏「レンブラントと 17 世紀ネーデルラントの「蒐集」に関する研究」, 平成 15 年～ 16 年度学研究費補助金・基盤研究(C)（2）研究成果報告書, 2005 年、15pp.

尾崎彰宏「男」を演じる女たち―― 17 世紀オランダ風俗画におけるペトラルカの影」、栗原隆編『芸術の始まる時、尽きる時』、東北大学出版会、2007 年、pp. 205-234.

尾崎彰宏「レンブラントの懐疑――堕落と自由のあいだ」、野家啓一編『ヒトと人のあいだ』、岩波書店、2007 年、pp. 63-86.

尾崎彰宏「レンブラントと 17 世紀オランダ美術における女性表現に関する研究」、平成 17 年～ 19 年度学研究費補助金・基盤研究(C)（2）研究成果報告書, 2008 年、15pp.

尾崎彰宏「１７世紀オランダ風俗画にみる「妻の鑑」」、栗原隆編『形と空間の中の私』、東北大学出版会、2008 年、pp.194-214.

尾崎彰宏「フェルメールのドラマツルギー」、『ユリイカ』2008 年 8 月号、pp.187-195

尾崎彰宏「ネーデルラントの素描力と古代への挑戦――ホルツィウス《ファルネーゼのヘラクレス》」『線の巨匠たち展』、東京藝術大学附属美術館、2008 年

芳賀京子「コピー作品における彫刻家の独創と注文主の創意 ―― アルカメネス作のヘルマ柱の場合 ――」『西洋美術研究』No. 10、2004 年、pp.12-28.

Kyoko Sengoku-Haga, The four sculptors and the main façade of the Mausoleum at Halikarnassus, *Silk Road Art and Archaeology,* 10, 2004,

pp.1-28.

芳賀京子「越境するアテナイ人彫刻家」『西洋美術研究』No. 14、2008 年, pp. 12-32.

芳賀京子「フェイディアス作《アテナ・パルテノス》（一）賦与された機能と感得される神性」『美術史学』、2008 年刊行予定

Francesco Lizzani "Lettere dal Giappone," *Aperture*, 17-18, Roma 2004/2005, pp109-132. 1）L'ologramma giappone, 2）Lettera enciclica numero sette, 3）Ikebana.

佐々木千佳「ジョヴァンニ・ベッリーニ作《聖なる寓意》の形態の源泉とその創意をめぐって」『美術史学』26 号、2005 年、87-122 頁

１－２　著書・編著

尾崎彰宏『レンブラントのコレクション』, 三元社, 2004 年, 300pp.

尾崎彰宏『フェルメール』、小学館、2006 年, 128pp.

尾崎彰宏『レンブラント、フェルメールの時代の女性たち―女性像から読み解くオランダ風俗画の魅力』、小学館、2008 年, 263pp.

芳賀京子『ロドス島の古代彫刻』、中央公論美術出版、2006 年、697pp.

Francesco Lizzani, *La quindicesima roccia. Stazioni di un viaggio in Giappone*, Aracne Editrice 2007.

１－３　翻訳、書評、解説、辞典項目等

（１）翻訳

尾崎彰宏「絵を読むこと――隠された世界の発見」『人文科学ハンドブック』東北大学出版会、2005 年、pp.166-170.

尾崎彰宏「史料翻訳　カーレル・ファン・マンデル著『絵画の書』（1604）（７）」、『東北大学文学研究科研究年報』、2005 年、pp.1-24.

尾崎彰宏「史料翻訳　カーレル・ファン・マンデル著『絵画の書』（1604）（8）」（共訳）、『美術史学』27 号、2006 年、pp. 121-136.

尾崎彰宏「史料翻訳　カーレル・ファン・マンデル著『絵画の書』（1604）（9）」（共訳）、『美術史学』28 号、2007 年、pp.77-96.

尾崎彰宏（日本語監修）『レンブラントの版画』、名古屋ボストン美術館、2007 年、104pp.

尾崎彰宏「工房」pp.96-101、「レンブラント・ファン・レイン――自己成型への挑戦」pp.154-164、藤枝・谷川・小澤編『絵画の制作学』日本文教出版、2007 年

尾崎彰宏「フェルメール――光の粒子のドラマ」『dankai パンチ』、2008 年 6 月号、pp.14-32

芳賀京子、展覧会カタログ『世界遺産・博物館島　ベルリンの至宝展 ―― よみがえる美の聖域』（東京国立博物館 2005 年 4 月 5 日～ 6 月 12 日）、朝日新 聞社、TBS、東映、作品解説の加筆・翻訳（nos. 52-73、84-121）

芳賀京子、日向太郎訳『ラオコーン ―― 様式と名声 ――』（サルヴァトーレ・セッティス著）三元社、2006 年

芳賀京子（翻訳監修）、展覧会カタログ『ウルビーノのヴィーナス』（国立西洋美術館 2008 年 3 月 4 日～ 5 月 18 日）、読売新聞社、2008 年

芳賀京子訳、ルチア・ピルツィオ・ビローリ・ステファネッリ「ローマの宝石彫刻　――18 世紀から 19 世紀の興隆」、展覧会カタログ『カメオ展　宝石彫刻の 2000 年　～アレキサンダー大王からナポレオン３世まで～』（箱根　彫刻の森美術館、2008 年 9 月 6 日～ 10 月 26 日他）、産経新聞社、2008 年、pp. 20-24.

芳賀京子・尾関幸訳、パウル・ツァンカー「ローマ帝政期の墓における市民の自己表現」、小佐野重利・木下直之編『死生学４　死と死後をめぐるイメージと文化』、東京大学出版会、2008 年、pp. 43-75.

芳賀京子、展覧会カタログ『ルーヴル美術館展　美の宮殿の子どもたち』（国立新美術館、2009 年 3 月 25 日～ 6 月 1 日）、朝日新聞社、作品解説の翻訳（出版予定）

佐々木千佳、展覧会カタログ『パルマ―イタリア美術、もう一つの都』(国立西洋美術館、2007 年 5 月 29 日～ 8 月 26 日)、読売新聞社、翻訳（第 1 章巻頭論文、第 1 章　nos.01-06,08-09,　第２章　nos.01-06, 第 4 章 nos.03,04

（２）書評

尾崎彰宏「幸福輝『ピーテル・ブリューゲル――ロマニズムとの共生』（ありな書房、2005 年）」図書新聞　2005 年 4 月 23 日号

芳賀京子「美術作品を読み解く上での「ルール」とは ―― 書評、サルヴ

ァトーレ・セッティス著『絵画の発明　ジョルジョーネ「嵐」解読』」『雲母』（京都造形芸術大学通信教育部誌）、2003 年、pp.51-52.

芳賀京子「A. Stewart, *Attalos, Athens, and the Akropolis: The Pergamene 'Little Barbarians' and their Roman and Renaissance Legacy*」『西洋古典学研究』55、2007 年、pp. 164-166

（３）解説

芳賀京子、展覧会リーフレット「ソンマ・ヴェスヴィアーナ出土の２体の大理石像」ディオニュソスとペプロフォロス　―― 東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果 ――』（東京大学総合研究博物館、2005 年）

芳賀京子「作品の記述と作品を見る目（古代ギリシア・ローマ）」『雲母』（京都造形芸術大学通信教育部補助教材）2006 年 8 月号、pp. 61-64

芳賀京子「ギリシア・ローマの美術」、展覧会カタログ『ほほえみの考古学展』（古代オリエント博物館、2007 年 3 月 17 日～ 7 月 1 日 他）、東京新聞、2007 年、pp. 16-17、および作品解説、pp. 124-130.

芳賀京子「ギリシアのアルカイック美術」『オリエンテ』（古代オリエント博物館情報誌）、No. 35、2007 年 7 月、pp. 7-10.

芳賀京子「《夜の女王》とフクロウ」『Herend Owl Club 通信』、No. 5、2007 年 12 月、pp. 1-2.

芳賀京子「ギリシア、アルカイック美術の魅力」『學鐙』、丸善株式会社、2008 年、pp. 18-21.

芳賀京子「ギリシアのヘレニズム美術　『グローバル美術の誕生』」、展覧会カタログ『ヘレニズムの華　ペルガモンとシルクロード』（岡山市立オリエント美術館、2008 年 9 月 6 日～ 11 月 3 日　他）、中近東文化センター附属博物館、2008 年、pp. 31-39.

（４）その他（研究報告・発掘報告）

Kyoko Sengoku-Haga, "VRC01 Preliminary Report. 3. Finds.（10）Marble sculpture,"　『文化交流研究』（東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要）、第 18 号、2005 年、pp. 78-79.

Kyoko Sengoku-Haga, "VRC02-04 Preliminary Report. Finds. Sculpture,"

『文化交流研究』（東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要）、第 19 号、2005 年、pp. 92-94.

芳賀京子「古代ローマ世界の『マント式ヘルマ柱』―― ローマ人によるギリシア美術のパトロネージ」『鹿島美術研究年報』23 号、2006 年、pp. 71-80

１－４　口頭発表

芳賀京子「古代ローマ世界の『マント式ヘルマ柱』―― ローマ人によるギリシア美術のパトロネージ ――」鹿島美術財団研究発表会、2007 年 5 月 11 日

芳賀京子「古代の人々の神像へのまなざし　――《アテナ・パルテノス》の場合 ――」美学会例会、2007 年 11 月 24 日

芳賀京子「2003 年出土の 2 体の大理石像　――《ディオニュソス》と《ペプロフォロス》」、国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」、2008 年 2 月 11 日

２　教員の受賞歴

芳賀京子、鹿島美術財団賞（2006 年度）

芳賀京子、地中海学会ヘレンド賞（2006 年度）

Ⅳ　教員による競争的資金獲得

（１）科学研究費補助金

平成 15 ～ 16 年度

尾崎彰宏（研究代表者）　平成 15 ～ 16 年度　課題番号：15520077　基盤研究(C)(2)研究代表者：尾崎彰宏「レンブラントと 17 世紀ネーデルラントの「蒐集」に関する研究」　2,300,000 円（2 年間総額）.

平成 17 年～ 19 年度

尾崎彰宏（研究代表者）　平成 16 年～ 17 年度　課題番号:17520076　基盤研究(C)(2)研究代表者：尾崎彰宏　「レンブラントと 17 世紀オランダ美術における女性表現に関する研究」　36,000,000 円（3 年間総額）

平成 20 年～ 22 年度

尾崎彰宏（研究分担者）「空間における形の認知を介した「主体」の存立の基底に見る感覚の根源性についての研究」　課題番号：20320003 基盤研究（**B**）

平成 17 年度

芳賀京子　平成 17 年度　研究成果公開促進費『ロドス島の古代彫刻』中央公論美術出版、2006 年 2 月出版　3,700,000 円

平成 18 ～ 19 年度

佐々木千佳（研究代表者）　　課題番号：18720022　若手研究(B)「ジョヴァンニ・ベッリーニの寓意・神話主題研究」　3,500,000 円（2 年間総額）

平成 19 年～ 21 年度

芳賀京子（研究代表者）　平成 19 年～ 21 年度　課題番号:19520088 基盤研究(C)（2)研究代表者：芳賀京子「古代ローマにおけるギリシア人彫刻工房の研究」 2,900,000 円（3 年間総額）

平成 20 年度

芳賀京子（連携代表者）「像（イメージ）の生動化についての比較美術史的研究」　課題番号：20320022 基盤研究(B)

（２）その他

平成 16 年度

尾崎彰宏（研究分担者）平成 16 年度東北大学教育研究共同プロジェクト、研究代表：松本宣郎　「東北大学歴史資源アーカイヴの構築と社会的メディア化」（学長裁量経費）

平成 17 年度

芳賀京子（研究代表者）　平成 17 年度鹿島美術財団「美術に関する研究調査」助成、「古代ローマ世界の『マント式ヘルマ柱』―― ローマ人によるギリシア美術のパトロネージ」　550,000 円

佐々木千佳（研究代表者）「東北大学若手研究者萌芽研究育成プログラム」（総長裁量経費）「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相－ 15 世紀から 17 世紀におけるアジアとヨーロッパの出会い－」　5,000,000 円（3 年間総額）

Ⅴ　教員による社会貢献（2004年度～2008年度）

尾崎彰宏「ネーデルラント美術に描かれた女性たち――レンブラントを中心に」（平成 16 年度 第 1 回 ポーラ美術セミナー）2004 年 2 月 20 日

尾崎彰宏「西洋美術への招待」有備館講座「歴史」2005 年 8 月 13 日

尾崎彰宏「17 世紀オランダに見る近代――レンブラントとフェルメールをめぐって」、科研費「新旧論争」ならびに学長裁量経費受託『藝術の始まる時、尽きる時』制作プロジェクト夏季、新潟大学、2006 年 8 月 19 日

尾崎彰宏「レンブラント、フェルメール絵画に見る女性たち」夏季公開研究会、新潟大学　2008 年 8 月 29 日

尾崎彰宏「聖と俗のあいだ―オランダ美術の魅力」宮城県美術館アート・ホール、2008 年 10 月 26 日

芳賀京子「ラオコーン　―― ロドスからローマへ ――」NHK 文化センター講座『地中海　美の回廊 ―― 旅する美術、芸術家たち』2004 年 4 月 19 日

芳賀京子「ソンマ・ヴェスヴィアーナの２体の彫像とローマ人によるギリシア文化の受容」『ディオニュソスとペプロフォロス展 ―― 東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果』講演会、2005 年 10 月 15 日

芳賀京子「ギリシャ ―― デルフォイ、アテネ、デロス ――」シルクロード講座『シルクロードの遺跡と都市』、2005 年 10 月 22 日

芳賀京子「古代ギリシア・ローマにおける造形作品に関する記述 ―― ひとびとはどのように美術品を眺めたのか？」京都造形芸術大学公開セミナー、2005 年 10 月 26 日

芳賀京子「ギリシアのアルカイク美術」古代オリエント博物館友の会講演会、2007 年 3 月 17 日

芳賀京子「《ラオコーン》―― ギリシア美術からローマ美術へ ――」中央大学市民講座、2007 年 6 月 2 日

芳賀京子「美術にみる古代ギリシア人の生と死」有備館講座、2007 年 7 月 14 日

芳賀京子「ギリシャのアルカイク美術」岐阜市立歴史博物館講演会、2007 年 9 月 16 日

芳賀京子「ラオコーンの名声と謎」東北芸術工科大学公開講座、2007 年 10 月 27 日

芳賀京子「古代ギリシア・ローマの美術を見る」NHK 文化センター、2007 年 10 月より隔週（現在に至る）

芳賀京子「古代美術における横たわる裸婦」国立西洋美術館特別講演会、2008 年 3 月 15 日

芳賀京子「ギリシアのヘレニズム美術」、岡山市立オリエント美術館特別講演会、2008 年 9 月 27 日

芳賀京子（パネリスト）、中近東文化センター主催『ペルガモンとシルクロード展』記念シンポジウム、2008 年 11 月 12 日（予定）

Ⅵ　教員による学会役員等の引き受け状況（2004～2008年度）

尾崎彰宏

美術史学会常任委員 2003 年～ 07 年

美学会常任委員　　2004 年 10 月から現在に至る。

芳賀京子

美術史学会常任委員 2007 年 6 月から現在に至る。

京都ギリシア・ローマ美術館評議員　2006 年 7 月から現在に至る

Ⅶ　教員の教育活動（2008年度）

（１）学内授業担当

１　大学院授業担当

教授　尾崎彰宏

通年　美学・西洋美術史特論

通年　美学・西洋美術史研究演習

通年　美学・西洋美術史研究実習

通年　美学・西洋美術史課題研究

准教授　芳賀京子

通年　美学・西洋美術史研究演習

通年　美学・西洋美術史研究実習

通年　美学・西洋美術史課題研究

２　学部授業担当

教授　尾崎彰宏

前期　美学・西洋美術史各論

前期　美学･西洋美術史基礎講読

後期　美学・西洋美術史概論

通年　美学・西洋美術史実習

通年　美学・西洋美術史演習

准教授　芳賀京子

前期　美学・西洋美術史概論

後期　美学・西洋美術史各論

後期　美学･西洋美術史基礎講読

通年　美学・西洋美術史実習

通年　美学・西洋美術史演習

３　共通科目・全学科目授業担当

教授　尾崎彰宏

基礎ゼミ「西洋美術への招待」

1 学期　英語原書講読入門

（２）他大学への出講（2004～2008年度）

教授　尾崎彰宏

2004 年度　岩手大学人文社会科学部（集中）、筑波大学大学院芸術研究科（集中）

2005 年度　岩手大学人文社会科学部（集中）、東京大学教養学部（集中）

2006 年度　岩手大学人文社会学部（集中）

2008 年度　岩手大学人文社会学部（集中）

准教授　芳賀京子

2004 年度　愛知大学文学部（半期）、大阪成蹊大学芸術学部（半期）、京都造形芸術大学通信教育部（集中）

2005 年度　愛知大学文学部（半期）、大阪成蹊大学芸術学部（半期）、

京都造形芸術大学通信教育部（集中）

2006 年度　愛知大学文学部（半期）、大阪成蹊大学芸術学部（半期）、京都造形芸術大学通信教育部（集中）、東京大学文学部・大学院人文社会系研究科（集中）

2007 年度　大阪大学文学部（集中）